

今、我々が住む地球は数字の上では世界のすべての人口を支えることのできる十分な食料を生産している。しかし、これから30年後の2050年にはどうなるのだろうか。数年前に国連が予測した2050年の世界総人口は約93億人。2019年の国連の発表によるとそれが97億人に増加している。現在の世界人口が約77億人だからこれから30年間に地球全体で約20億人増える計算なる。日本や多くの先進国で人口が減少しているのに、国連はインドを筆頭にパキスタンを含めた9つの国の人口増加が、今後30年間の世界全体の人口増加の50%以上を占めるだろうと予測している。そしてサハラ砂漠以南のアフリカの人口は2050年までの30年間に2倍に膨れ上がるという。注意が必要なのは、現在既に慢性的飢餓や栄養不足で苦しんでいるサハラ砂漠以南のアフリカや南アジアの国々で将来の世界の人口増加の大半が起こるだろうという事実だ。

他方、一人当たり1日の食料の平均摂取量(カロリー換算)は年々増加の一途をたどって2050年には3000-3200キロカロリーに達するといわれており、10年前の約2800キロカロリーに比べると一割近く増えるだろうと推測されている。

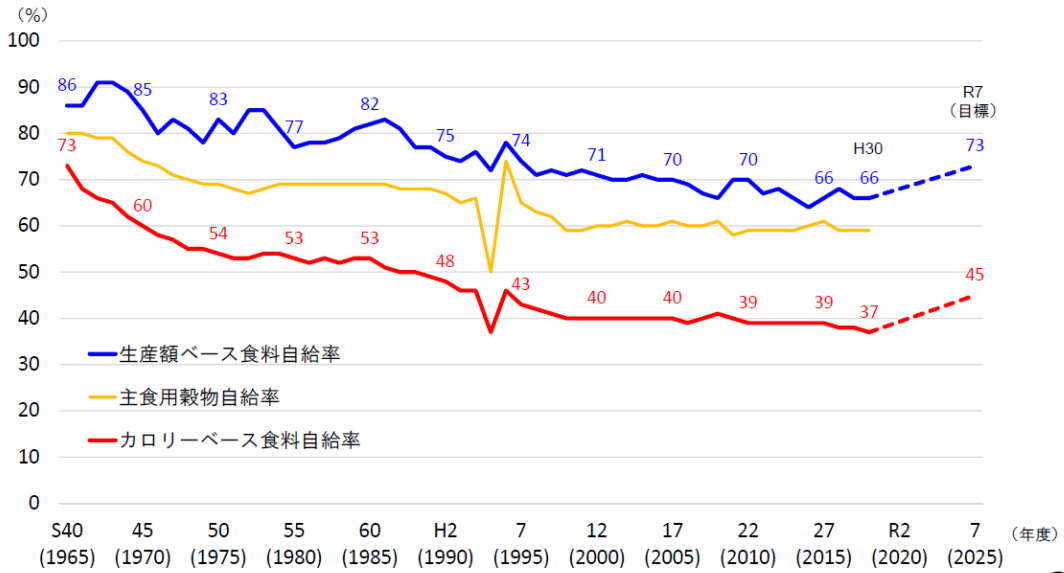
増加を続ける世界人口と加速する一人当たりの食料摂取量の双方の要求を満たすために、国連は2050年までに(2012年を基準として)食料の生産を世界全体で49%、サハラ砂漠以南のアフリカと南アジア諸国だけだと112%増産しなければ需要に満たなくなると警告している。もし、これが達成できなければ、アフリカや南アジアなどを中心に飢餓や餓死者の増加、商店などへの焼き討ち、政情不安、食料をめぐる紛争、テロ活動などが頻発するだろう。

おそらく、人類の英知と最先端科学技術を応用すればこれらの目標を達成するのは不可能ではないだろうと楽観的に憶測することも可能だが、それと同時に、手が届かない、大きな難問が我々の前に立ち塞がっている。それは、個人や国家単位での貧富格差の増大と国内外での紛争の増加、そして地球温暖化・気候変動の悪影響である。事実、これら2つが主な要因になり、世界の慢性的飢餓人口は飢餓撲滅(ゼロハンガー)に向け10年以上続いた順調な減少傾向から2016年以来、過去2年続けて一機に増加に転じた。

もし、将来、世界的な食料不足や飢饉が起きたら食料を海外に大きく依存する日本は大打撃を受けるだろう。新型コロナウイルスの影響で中国からの安い玉ねぎやニンニク、野菜などが入荷が滞っただけで大騒ぎになった。

カロリーベースの食料自給率が過去最低の37%(平成30年 農林省)に落ち込み、政府が掲げている2025年までに45%に引き上げるという目標から更に遠ざかった日本。それでも主食のコメだけが自給率ほぼ100%近くを維持しているのは、内外からの影響にもめげず、地道に守り努力するコメ生産農家のおかげだ。

○ 食料自給率は、米の消費が減少する一方で、畜産物や油脂類の消費が増大する等の食生活の変化により、長期的には低下傾向が続いてきましたが、2000年代に入ってから概ね横ばい傾向で推移しています。



(注) 主食用穀物自給率は、米、小麦、大麦はだか麦の合計について、国内生産量から国内産の飼料仕向量を、国内消費仕向量から飼料仕向量全体をそれぞれ控除して算出。